

2.4 第3回開催

2.4.1 開催概要

タイトル：文部科学省委託事業「ケータイモラルキャラバン隊」茨城県県西地区 PTA 連絡協議会、(社) 青少年育成茨城県民会議 合同研修会

開催日時：平成 24 年 1 月 14 日（土）13 時 30 分～16 時 20 分（会場 13 時）

開催場所：結城市民文化センター アクロス 1F 展示室

定員：60 名（ワークショップ参加者）、60 名（一般聴講者）

開催形式：ワークショップ（1 グループ：10 名程度×6 班で実施）

実施内容：1 グループに 1 名ファシリテーターを置き議論を促す

主催：株式会社メディア開発総研 文部科学省

共催：茨城県県西地区 PTA 連絡協議会 (社) 青少年育成茨城県民会議

後援：茨城県 茨城県教育委員会

協力：安心ネットづくり促進協議会 茨城県メディア教育指導員連絡会

2.4.2 プログラム

時間	場所・内容	登壇者	備考
13:30	開会挨拶	茨城県県西地区PTA連絡協議会 会長 石橋良章様	
13:35	ケータイモラル、情報等に関する小学校・中学校での取組	文部科学省 スポーツ・青少年局参事官 (青少年健全育成担当)付 青少年有害環境対策専門官 関根章文様	
13:55	ワークショップのオリエンテーション	熊本市立河内中学校 教頭 桑崎剛様	
14:05	ワークショップ ファシリテーター	安心ネットづくり促進協議会 事務局次長兼企画部長 NPO法人企業教育研究会 事務局長 学校法人岩崎学園 理事 青山学院大学 ヒューマンイノベーション研究センター客員研究員 Yahoo! JAPAN 事業戦略統括本部 モバイルコンテンツ審査・運用監視機構 事務局 石原友信様 市野敬介様 植田威様 齋藤長行様 箕輪憲良様 吉岡良平様	6班×10名で実施 1班に1名のファシリテーター
16:10	講評	熊本市立河内中学校 教頭 安心ネットづくり促進協議会 特別会員 桑崎剛様	

16:20 イベント終了

2.4.3 講演者プロフィール

講演者

桑崎 剛（くわさき つよし）



熊本市立河内中学校 教頭 安心ネットづくり促進協議会 特別会員
東京都私立高等学校講師以降、熊本県立中学校（合志中学校他）教諭、熊本市教育委員会教育センター指導主事、熊本県立中学校教頭（東部中学校他）を経て現職

現在は日本教育工学協会（JAET）理事、熊本県小・中学校情報教育研究会 副会長、文部科学省 教育の情報化総合モデル支援事業 企画評価委員他に従事その他、「ガイアの夜明け」他 TV 出演や新聞等「子どものケータイ問題」の記事掲載多数

2.4.4 シンポジウム概要

2.4.4.1 文部科学省施策説明「ケータイモラル、情報等に関する小学校、中学校での取り組み」

登壇者：文部科学省 スポーツ・青少年局参事官（青少年健全育成担当）付
青少年有害環境対策専門官 関根章文

<講演内容>

1.子どもの携帯電話等の実態把握について

子どもの携帯電話の学年別所持率、使用状況、学習への影響等についてデータを紹介。

2.子どもや保護者への啓発

子ども向け及び親子のルールづくりに係るリーフレットの紹介。青少年インターネット環境整備法の普及啓発状況についての説明。

3.学校での携帯電話の取扱い

小中学校への原則持ち込み禁止等、指針についての説明。

4.ネット上のいじめへの対応

「ネット上のいじめ」に関する対応マニュアルの説明。

5.情報モラル教育の推進

新学習指導要領の総則において、情報モラルを身に着けることを規定したことの説明。

6.平成 24 年度概算要求

青少年を有害環境から守るための取組の推進について、および本事業の継続についての説明。

図 2-25 文部科学省の取組資料

子どもの携帯電話をめぐる問題に関する文部科学省の取組	
1. 実態の把握 ・子どもの携帯電話の使用状況の把握 平成22年度全国学力・学習状況調査によると、小6の約30%、中3の約60%が携帯電話を持っている。また、小6の約10%、中3の約32%が通話やメールを毎日している。 ・子どもの携帯電話等の利用に関する調査 子どもたちの携帯電話の利用実態や携帯電話に対する意識等を把握するため、全国の小・中2・高2とその保護者及び学校を対象とした調査を平成20年度に実施。(中2の携帯電話所有者の約92%がメール送受信1日50通以上) ・いじめに関する調査を巡る実態把握 毎年実施している「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」において、平成18年度分の調査より、調査項目の見直しを行い、「いじめの態様」に「パソコンや携帯電話等での嫌なことをされる。」という項目を追加。(小・中・高・特別支援学校において、平成22年度は2,924件、初等・中等・高等の順で増加している。) ・学校裏サイト等の実態把握 青少年が利用する非公式サイト・匿名掲示板等に関する実情調査を平成19年度に実施。全国で約38,000の非公式サイト(いわゆる学校裏サイト)が確認できた。そのうち、約2,000の非公式サイトの内容を確認したところ、排撃中傷の言葉が約50%、わけのわからない言葉が約37%、暴力誘発の言葉が約27%含まれていた。 ・青少年が利用するコミュニティサイトの実態把握 青少年が利用するコミュニティサイトに関する実情調査を平成21年度に実施。調査期間中約10万件の投稿を確認し、うち注意を要する投稿、問題のある投稿は6,150件と全体の約3%、投稿者の約9割が女性であった。投稿サイト種別ではブログ・メールサイト・ブログが全体の約53%を占め、掲示板が約39%であった。注意を要する投稿、問題のある投稿の内訳は、個人情報の掲載が約60%、次いで不適切行為の告白が約21%となっている。この調査により、掲示板型のサイトからブログやSNSへの移行、監視が徹底されていないサイトがある、特定のサイトに特定の書き込み(自殺・自傷など)をする傾向がみられた。	・青少年インターネット環境整備法の普及啓発 平成21年2月10日に、内閣府、警察庁、総務省等と共同で、青少年インターネット環境整備法の4月施行とフィルタリングの普及促進のため、啓発活動に取り組むよう文書で依頼。平成23年3月23日に、「青少年が利用する携帯電話へのフィルタリングの普及について(協力依頼)」通知を教育委員会等に発出。 ・「e-ネットキョーパノ」の実施 総務省、文部科学省及び通信関係団体等が連携し、子どもたちのインターネットの安心・安全な利用に向けて、保護者、教職員及び児童生徒を対象とした啓発講座を実施。
2. 子どもや保護者への啓発 ・子ども向け及び親子のルールづくりに係るリーフレットの作成・配布 平成22年2月17日、携帯電話のインターネット利用に際しての留意点やトラブル・犯罪被害の事例、その対処方法のアドバイスなどを盛り込んだリーフレット「ちょっと待って、ケータイ」を作成し、全国の小学6年生約120万人全員に配布。また携帯電話利用に係る親子のルールづくり等に関するリーフレット「ちょっと待って!」はじめてのケータイも作成し、PTA団体・都道府県教育委員会等に对于て配布。現在でも文部科学省HPからダウンロード可能。 ・ケータイモラルキャラバン隊の結成 インターネット上のマナーや家庭でのルールづくりの重要性を周知するための有識者等によるキャラバン隊を結成し、全国(6ヶ所)で保護者等を対象とした学習・参加型のタウンミーティングやワークショップなどを平成23年度より開催。URL (http://www.mext.go.jp/a_menu/ss/sisyounen/moral/1313148.htm)	3. 学校での携帯電話の取扱い ・携帯電話等をめぐる問題への取組の徹底 携帯電話の学校への持込めに関する調査の結果を踏まえて、小中学校への原則持込み禁止、高等学校の校内での使用制限等の指針を示した「学校における携帯電話の取扱い等について(通知)」を平成21年1月30日に発出。 4. ネット上のいじめへの対応 ・「ネット上のいじめ」に関する対応マニュアル・事例集(学校・教員向け)の作成・配付 「ネット上のいじめ」を発見した場合の対応の手順や指導の在り方、家庭との連携等について、マニュアル・事例集を平成20年11月12日に作成し都道府県教育委員会等へ配布。 ・学校ネットリテラシーに関する調査研究 ネットリテラシーの効率的・効果的な実施方法や、継続的な実施の在り方等について調査研究を平成22年度から実施。 5. 情報モラル教育の推進 ・新学習指導要領等の実施 小中学校及び高等学校の新学習指導要領の「総則」において、各教科等の指導に当たっては、児童・生徒が「情報モラルを身に付ける」ことを規定。小中学校については平成21年4月から、高等学校については平成22年4月から先行実施。また、教育の情報化に関する総合的な推進方策「教育の情報化プラン」を平成23年4月28日に策定。このなかで、情報モラル教育の重要性について明記。 ・違法・有害情報に適切に対応する能力の育成を含む情報モラル教育を推進 ◆平成18年度に情報モラル指導モデルカリキュラムを作成。 ◆平成19年度に情報モラル指導ポータルサイトを構築。 ◆平成22年度に国立教育政策研究所において、小中学校教員向けの指導資料「情報モラル教育実践ガイド」を作成。 ◆平成22年度から、独立行政法人教員研修センターにおいて、情報モラル教育に関する指導者研修を実施。 6. 平成24年度予算(案) ・青少年有害環境から守るための取組の推進 (24年度予算額 60百万円(23年度予算額 101百万円)) フィルタリングの普及啓発やケータイモラルキャラバン隊については継続。インターネットにつながる新たな機器への対応や緊急時に有効なインターネットの活用など青少年が研修するとともに、課題や対処法も含めて話し合い、その結果を、家族や友人に伝えて発信する事業「青少年安心ネット・ワークショップ」を実施予定。また、HPよりダウンロードできる有害情報意識啓発動画の作成も予定。さらに先進的な取り組みを充実させる「地域における有害情報対策推進事業」も実施予定。

<講演風景>



2.4.4.2 ワークショップのオリエンテーション

登壇者：熊本市立河内中学校 教頭、安心ネットづくり促進協議会 特別会員 桑崎剛

<講演内容>

- ・子どもたちを取り巻くネット環境
- ・ワークショップの説明

2.4.4.3 ワークショップ

ファシリテーター：安心ネットづくり促進協議会 事務局次長兼企画部長 石原友信

NPO 法人 企業教育研究会 事務局長 市野敬介

学校法人岩崎学園 理事 経営企画部長 植田威

青山学院大学

ヒューマンイノベーション研究センター客員研究員 齋藤長行

Yahoo! JAPAN 事業戦略統括本部 箕輪憲良

一般社団法人モバイルコンテンツ審査・運用監視機構 事務局

吉岡良平

<ワークショップ内容>

- ・ケータイを持つことのメリット、デメリットとは
- ・メリット、デメリットに対して「家庭でできる3つの行動指標」

<ワークショップ風景①>



<ワークショップ風景②>



＜ワークショップ風景③＞



2.4.4.3.1 ワークショップでのまとめ

- A 班：①子どもだけでなく親も守れるルール作り。ルールを破ったら罰則あり
 ②子どもに持たせる機器の選択をしっかりとする
 ③家族の中で直接顔を合わせる事の重要性を話し合い、考えておく
- B 班：①親子で会話し、ルールを作る。その上でコミュニケーションや人間関係を育む
 ②料金の上限の設定、フィルタリングなどについて、合意をして決めていく
 ③子どもの成長に合ったケータイの使い方を大人が理解する
- C 班：①親子で話し合い、子どもが納得したルールを決める
 ②子どもとコミュニケーションを取るためにまず親がケータイについて学ぶ
 ③フィルタリングは絶対に外さない
- D 班：①家庭内のルールを作る。破った際の罰則を設ける
 ②子どもの成長に伴いルールを更新する
 ③親子でしっかりとコミュニケーションを取る

E 班：①全ての原因がコミュニケーション不足から起きているため、親子でコミュニケーションを取ることが一番重要。その中でルールや、フィルタリングについてなど話し合って決めていく

F 班：①子どもの使う能力に応じて、親の関わり方を考える
②便利な機能を使いながら、一方で頼りすぎないようにする
③ケータイを使うときは時、場所、状況を考えて使う

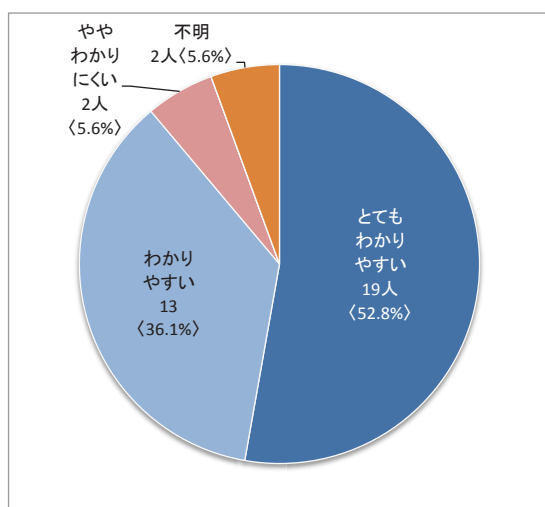
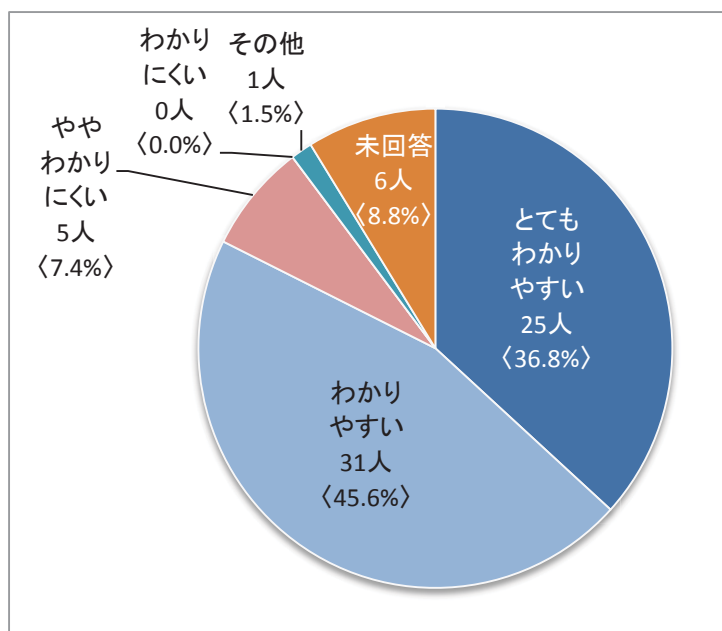
2.4.5 第3回開催結果と評価

2.4.5.1 アンケート結果より

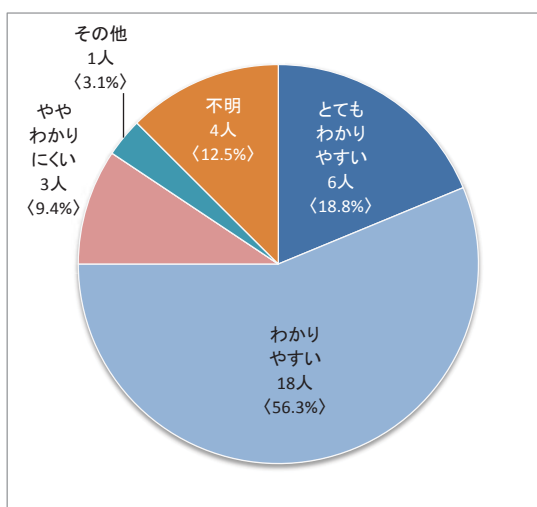
■ 講演について

今回のシンポジウムは文部科学省の講演、ワークショップの2部構成で行った。それぞれの講演について感想を聞いたところ、文部科学省の講演については「とてもわかりやすい」「わかりやすい」を合わせて約8割の人が比較的分かりやすいと感じた。

図 2-26 文部科学省の講演について (N=68/茨城)



(N=36 : ワークショップ参加者)

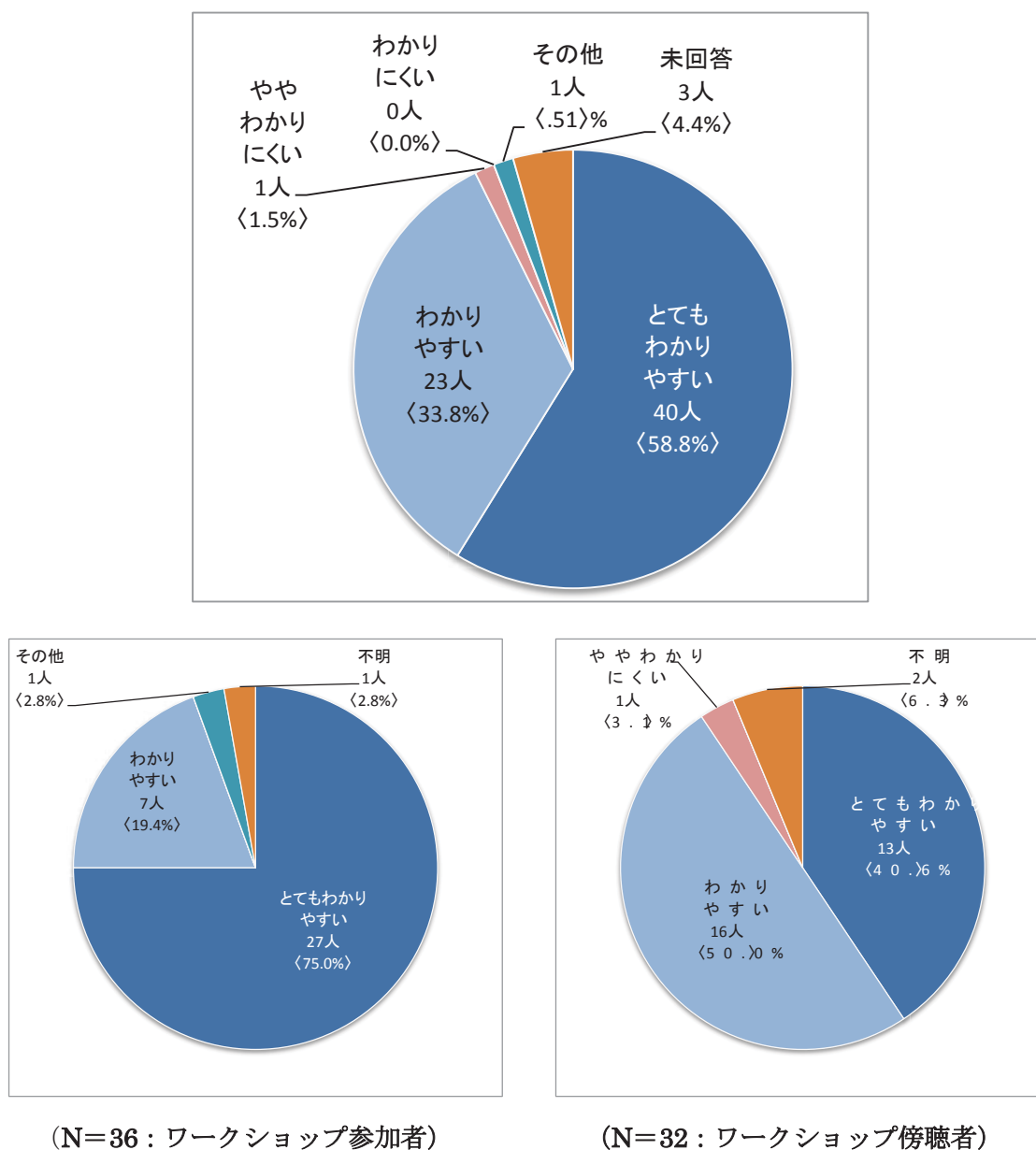


(N=32 : ワークショップ傍聴者)

■ ワークショップについて

ワークショップについては40人(58.8%)が「とてもわかりやすい」と回答した。「わかりやすい」も23人(33.8%)と非常に高い評価を得ている。ワークショップ参加者とワークショップ傍聴者と比較してみると、ワークショップに参加した人の感想では「とてもわかりやすい」が75%に達しており「わかりやすい」を合わせて非常に評価が高かった。一方、ワークショップを傍聴した人は「わかりやすい」と回答した人が50%と半数に上る。結果を比較してみると、実際に参加するというだけで理解が深まっていることが分かる。

図 2-27 ワークショップについて (N=68/茨城)

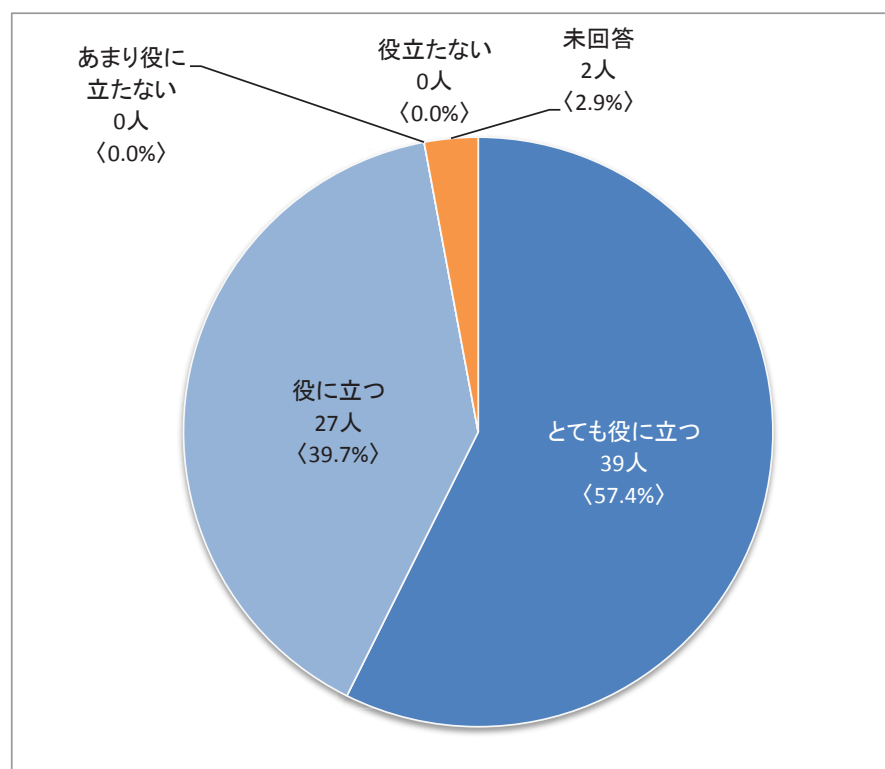


■ 講演会の内容は今後に役立つか

シンポジウムの内容は今後の子育てや教育・指導、活動や取り組みに役に立つか尋ねたところ、「とても役に立つ」と回答したひとは 39 人（57.4%）と半数以上を占めた。また「役に立つ」と回答した 27 人（39.7%）と合わせると、比較的役に立つと回答したひとが 95% 以上に上り、他県で行ったシンポジウムと比べても非常に高い評価をえることができた。否定的な回答はなく、「未回答」が 2 人（2.9%）いた。

どんな内容が役に立つと感じたか自由筆記にて記述してもらったところ、「ワークショップ形式によって多くの人の意見が聞けた」「家庭内でのコミュニケーションの大切さ」「携帯電話は自転車と同じという話」という意見が多かった。

図 2-28 講演会（および会場トークセッション）の内容は役立つか（N=68／茨城）

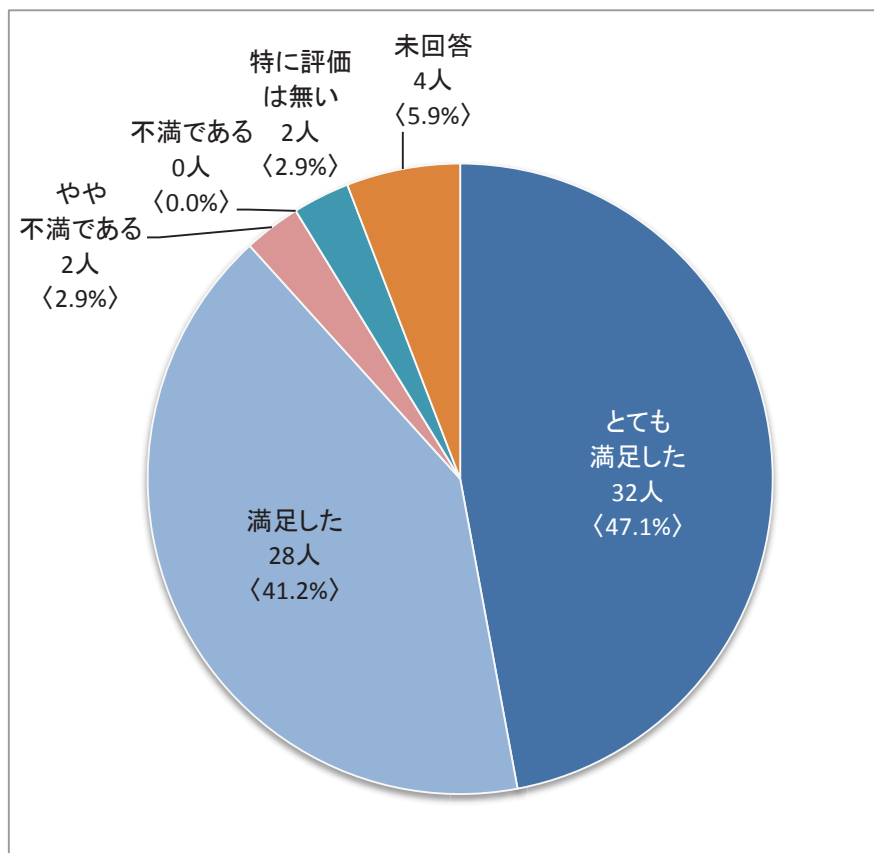


	とても役に立つ	役に立つ	あまり役に立たない	役に立たない	不明
ワークショップ参加者	27	9	0	0	0
ワークショップ傍聴者	12	18	0	0	2

■ シンポジウムの満足度

今回のシンポジウムの満足度を聞いたところ「とても満足した」32人（47.1%）、「満足した」28人（41.2%）となり、満足したという参加者は9割近くに上った。「不満である」と感じた人はなく、「やや不満である」の2人（2.9%）がネガティブな意見として上がった。他には「特に評価は無い」が2人（2.9%）、「未回答」4人（5.9%）という結果になった。

図 2-29 シンポジウムの満足度（N=68／茨城）



	とても満足した	満足した	やや不満である	不満である	特に評価は無い	不明
ワークショップ参加者	23	11	1	0	0	1
ワークショップ傍聴者	9	17	1	0	2	3

■ シンポジウムに参加して子どもの携帯電話利用についてどう考えたか

シンポジウム参加後に子どもの携帯電話の利用についてどのように考えを持ったか聞いたところ、「家庭でのルール作りや教育が必要」「保護者がもっと勉強して対策することが必要」が49人、「親子で適切な利用について常に話し合うことが必要」48人、「子どもに使い方やマナーを教育することが必要」46人と、4つの選択肢に回答が集中した。いずれも親、家庭内、親子関係の項目であり、多くの人が重要性を認識した結果となった。

「学校でのルール作りや教育が必要」「フィルタリングサービスの導入を徹底する」もそれなりに回答が集まったが、同時に「携帯電話を持つことによるメリットがあることもしっかり認識することが大切」にも同等の回答が集まっていることから、一定の認識が得られたと評価できる。

図 2-30 参加後の子どもの携帯電話利用についての考え（N=68：複数回答可／茨城）

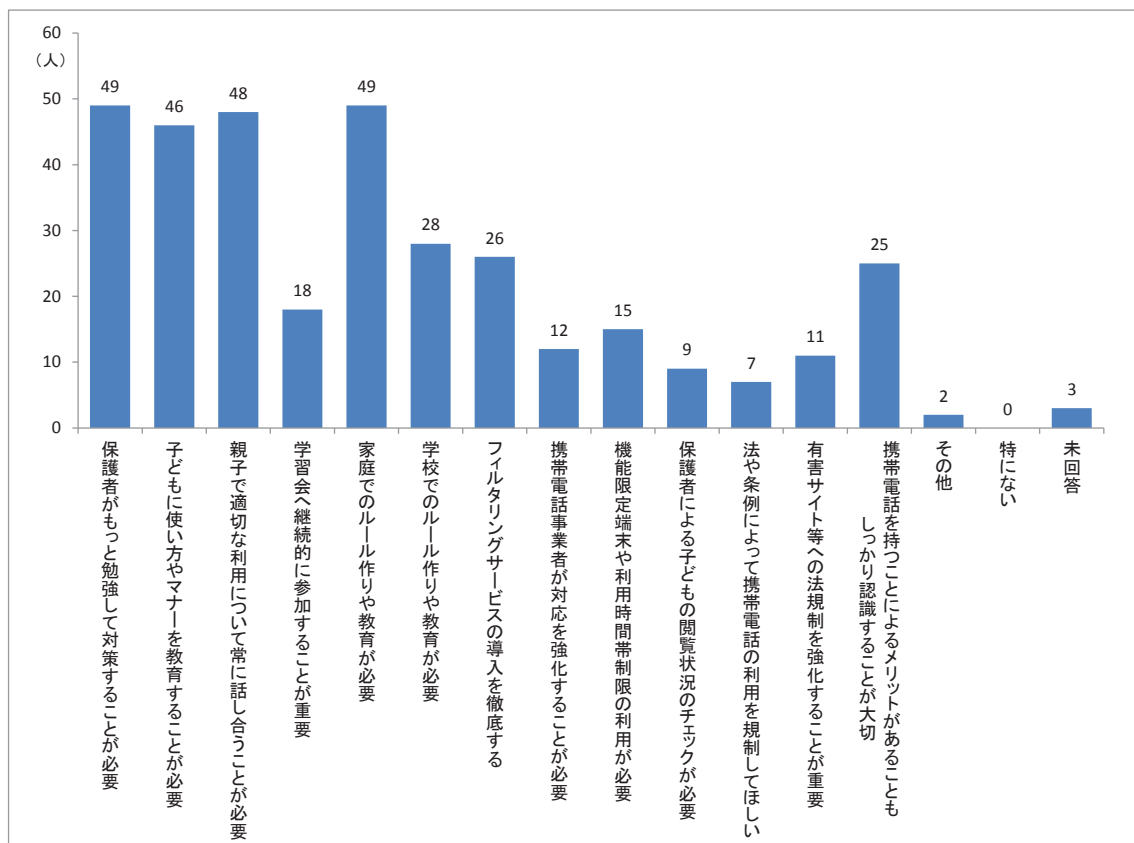


図 2-31 参加後の子どもの携帯電話利用についての考え (N=36：ワークショップ参加者)

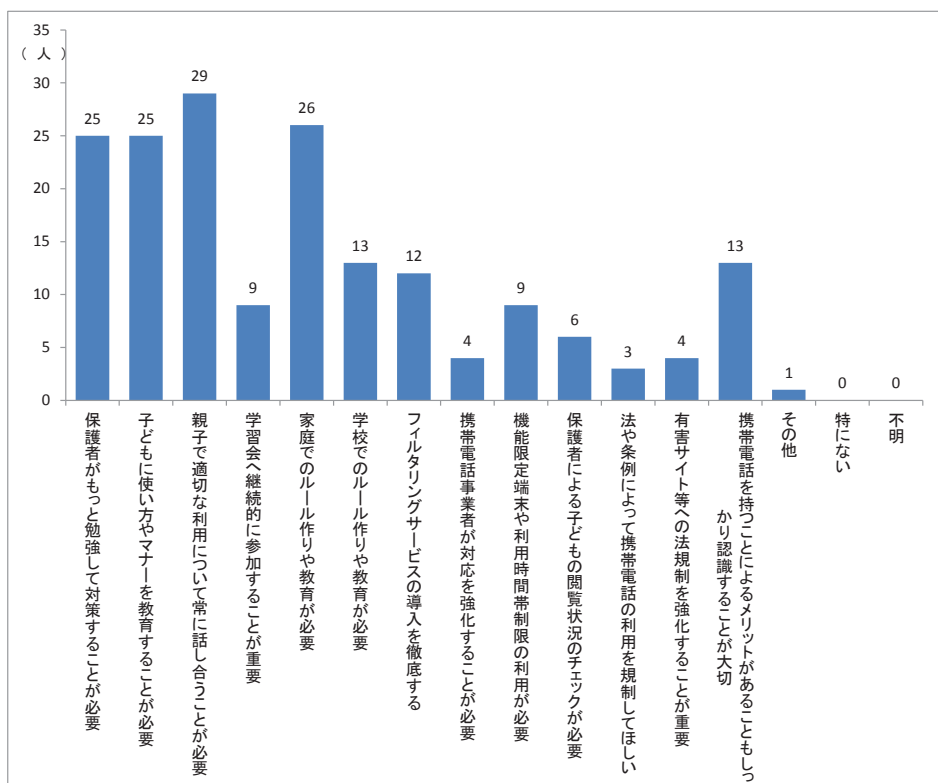
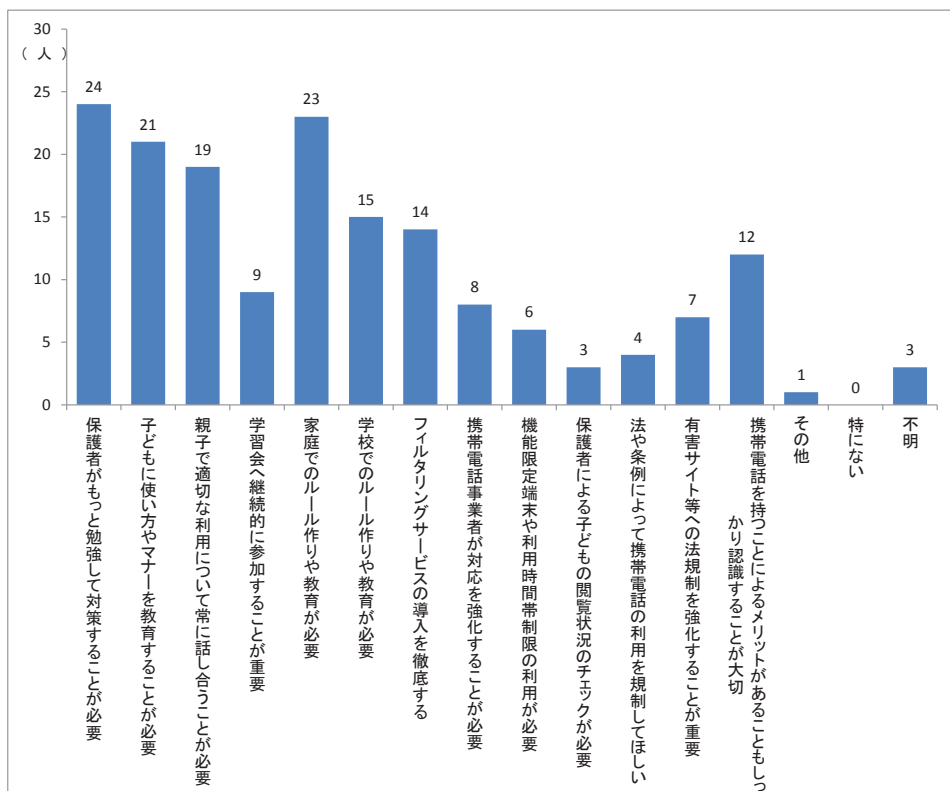


図 2-32 参加後の子どもの携帯電話利用についての考え (N=32：ワークショップ傍聴者)

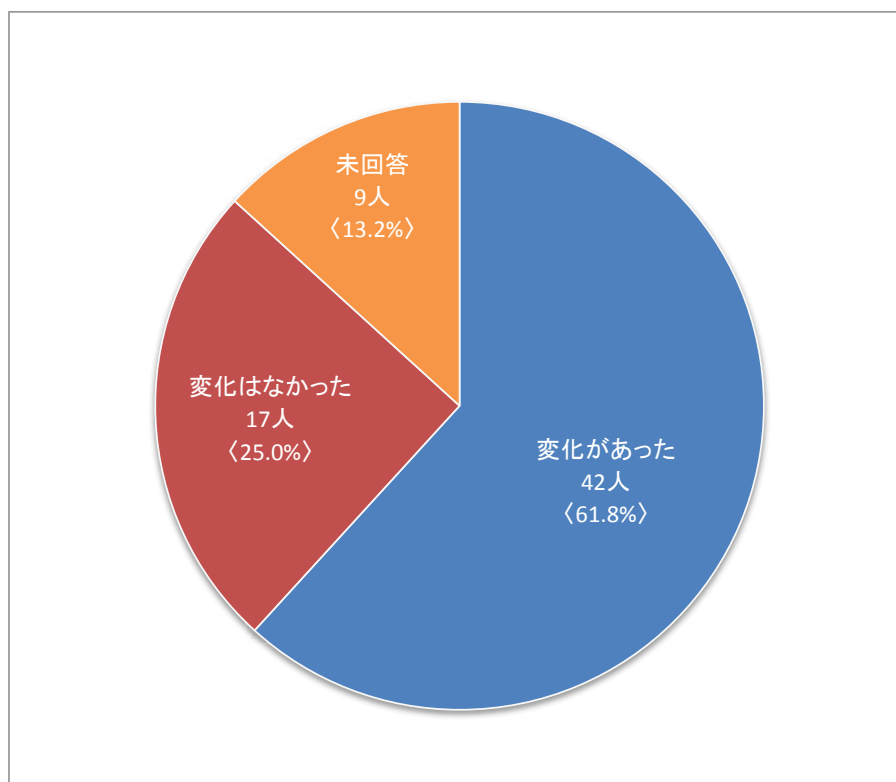


■ 参加後の心境、考えの変化について

シンポジウム参加後に自身の心境、考えに変化はあったか聞いたところ、「変化があった」と回答した人は42人（61.8%）と6割以上が変化はあったと回答した。42人には加えてその変化はどのようなものであったか自由筆記にて記述してもらった。多かった内容は「親自身の勉強がもっと必要だと思った」「携帯電話＝悪、携帯電話は持たせてはいけないとする考えを直そうと思った」「親子で考えていければいいと思った」という意見が多かった。

一方で、「変化はなかった」と回答した人は17人（25.0%）いた。その中には「変化はなかったが現状は再認識できた」という回答もあった。また「未回答」は9人（13.2%）と若干多かった。

図 2-33 シンポジウム参加後の心境、考えの変化の有無（N=68／茨城）



	変化があった	変化はなかった	不明
ワークショップ参加者	27	8	1
ワークショップ傍聴者	15	9	8

■ シンポジウムに関する意見

図 2-34 どんな内容が「とても役立つ」「役立つ」と感じましたか？

色々な人の意見が聞くことが出来てとても参考になりました。これから役立てていきたいと思います
親としてのいろいろな意見を聞いたこと
色々な考えが聞けた
親も良く考え、理解せねばならない
家庭でできる事について話し合ったこと
ルール作り、ルールの更新について
親子関係をしっかり築き、何のためにケータイを使うのか、話し合い、便利な道具の1つとして使用(利用)する
ワークショップでの形はとても良かったです
今後の対応について学習したので役立てたい
自分の意見以外のことがいろいろ聞けて役に立ちました
いろんな方の意見を聞くことが出来た
子供をどう育てるか？自転車乗るのと同じ、コミュニケーションとモラル
ワークショップでいろいろな意見がきけたこと
ワークショップ
ワークショップでの意見はほぼ同じと感じました
子どもに対する接し方
親のかかわりが大切ということ
家庭内のルールづくりの必要性和具体例があったので、役に立ちました
「ケータイは、自転車に乗るのと同じである」との話がわかりやすかった
多くの意見が参考になった
親の立場としての再認識。子供への教え
ケータイを持つことの深い意味
たくさんの人の意見が参考になりました
コミュニケーション、話し合いが必要だと思った
ファシリテータを活用した話し合い
情報化社会の熟成のためのアイデアがいっぱいでした
桑崎先生の結びの言葉が良かった
ケータイを上手に使える様な子どもに育てる事、ケータイは一つの便利な道具として親子でしっかりとコミュニケーションを取りながら学んでいく事が大事という話に意識がかなり変わりました
具体的にたくさんの人の話を聞いた事を活用できる
ワークショップの流れ。ファシリテーターの役割
家庭での現状や課題が分かった
ワークショップ形式の学習方法
自分では理解していない情報を聞く事が出来た
自分のこととして考えられた
今回のワークショップ形式により多数意見が出やすい状況を作れたこと
みんなの意見が聞ける
親子のコミュニケーションの大切さが分かりました
学習を通して、親も理解を深め、子育てをしていく必要性を感じた
ケータイを1つの道具として見ている方がいることに感心しました
ブレストにより
多くの人の意見を聞くことができたこと

図 2-35 シンポジウムに参加して、あなたの心境やお考えに変化はありましたか？

(「変化があった」と回答した方に、それはどのような変化でしたか？)

親も勉強が必要と感じた
保護者の勉強の必要性
自転車に乗り始めた子供と同じ…教える事が大切
使い方について子供と話し合いたい
ケータイ=悪の考え方を少し変えていきたいと思った
まったく必要ないと思っていましたが、そう思い込むだけでなく使用(利用)、自分で使える子に育てることも大切だと思いました
もっと親がふみ込んでの理解が必要。コミュニケーションの大切さ
ケータイは悪でない
色々な考えがあり時代の変化に対し、子も親も変化している事の自由化と情報化社会への危険度の認知と、沢山の意見があり、とても勉強になりました
ケータイを禁とするだけでなく使用して、マナーやルールを学ばせなければならないのかなと少し思った
携帯の効用について
ケータイを持たせることを積極的に考えてもいいと思いました
経験者のご意見が聞けた
携帯に対する見方の重要性
子供にケータイを持たせる気はなかったが、ルール等定めて持たせてもいいのかなと思いました
もっと親が勉強することが必要
ケータイを持たせている事に多少罪悪感をもっていました、うまく使えばいいのかと思いました
大人がもっと勉強していく場が必要であると感じた
ネット社会がまだ10年ということを改めて認識した
親子で勉強する、話し合いをもつようにしたい
携帯への安易な気持ちが変わった
とても勉強になった。子育てに向き合いながら使用していきたいと思いました
変化はなかったが、現状は再認識できてよかった
親子間のコミュニケーションの大切さを感じました。家に帰って子どもと話をしたいと思います

図 2-36 シンポジウムに対するご意見を自由にお書きください。

今回参加させていただいて自分のためにとても勉強になりました
ワークショップ形式は大変良かった
子供達と一緒にいっても良いのではないかな？
疲れましたが、おもしろかったです
各地区でもこの様な会が行われればと思います。ありがとうございました
楽しい学習会でした
大変勉強になりました
とても身になりました。「子は小さいから、まだまだ…」と思っていた甘さの自分に反省…
すばらしかったと思います。ありがとうございました
社会全体の意識を変えないと、教育現場だけでは変わらない。永遠の課題です
とても参考になった
多くの意見を聞くことができてよかったです
同じ意識の方が多いのですが、これが本当に世の親たちと同じなのか？また男性、女性でやはり考え方が多少ちがうかもと不安点があります
とても有意義でした
意見交換ができてよかった
ワークショップは非常に有効だった
上手に利用する方法を話し合っていきたいと思います。これからは学校、行政、様々な場でワークショップを開催していただきたいと思います
子どもの発達段階と使用許容の関係
とにかく、いろいろな方に多くの方に参加していただきたいと思います
このような機会を増やしてほしい
孫の世代になったけれど、自分の子供の時にこう勉強をしたかった
ワークショップの研修、とても勉強になりました。ちなみに私の子供、高校(県外)、ケータイはぜったいダメでした。月1回、門に先生が20人くらい、カバン、制服をすべてチェックし、持っている人は親の呼び出しでした。持っていない人は部活の部長だけ、先生と親の連絡のみ、それでも子供は不満ではありませんでした。中学校から使用していたのに高校では使いませんでした。学校での教育も必要。もちろん家庭も。高校のとき、厳しくしてもらったおかげで、現在娘25才電話料金は3000円(使っている時でも)です
メール用の文章について相手に気持ちが伝わらないことが多い。年代的なものか？子供たちは大丈夫でしょうか
みなさんの意見を聞くことができたこと、とても良かった。そうそう、その通りというように、みな同じ考えをしていたことが、はげみになった気がする
意見交換の場(プレスト)があつてよかった
ケータイというものの価値観が変わり、大変勉強になりました
とても良かったです。今後も各地域で学習会、研修会を開催してほしいとおもいます。(親だけ、子どもだけ、親子一緒など)

2.4.5.2 ファシリテーターの評価

ファシリテーターからワークショップ実施後にアンケートを実施した。その評価を掲載する。

Q1：通常のセミナー／シンポジウムと比べ、今回のワークショップ型研修は、参加者にとってどのような点で効果的だったとお感じですか。

A：このテーマは、保護者が少年時代に経験してこなかった内容であり、子どもを育てる上で不安に感じている課題の一つであるが、そのことを自らアクションをとって対策に乗り出す意欲は十分とは言えない。とはいえ、すでにケータイが普及して 20 年近くになり、これまでの使用経験や座学によって、個人差はあるが一定の知識は有している。今回の研修形式では、同じ悩みをかかえる保護者同士が互いに、「同じ悩みを持っていること」や「ベストプラクティスの共有」を経験できたことで、少なからず子育ての自信につなげることが出来たと推察する。

B：受け身ではなく、自ら考え、議論に参加することで、深い理解が得られたと思う。また、『自分ごと化』ができたことから、多くの班からでていた「親子のコミュニケーション」「ルールを決めること」について、実際に家庭で実践してもらえる可能性が高くなったと思う。

C：自分の思っていることを話す時間があるので、満足度が高い。他の参加者の経験が共有されるので、その地域ごとの実態にあった意見が聞ける。寝ている暇がない。

D：情報提供だけでなく、必然的に発言機会を得ることで、課題やその解決策について思考し、発言するプロセスを踏むことで、自身にとって実感のある内容になるとともに、講師からの一方的な情報ではない、同様のプロセスを踏んだ意見を身近に聞くことにより、フィジカルな情報として入手することが可能になる。

E：参加者が、「課題」に対して自ら深く主体的に考え、他の参加者の意見を聴き、更に認識を深めることができたと考える。とりわけ、各グループの発表者は、発表に先立って、短時間にグループの意見を整理・集約したという点で、理解の深化があったのではないかと考える。

F：参加者自身が主体的に学ぶことにより、参加の内省活動を刺激できたと考えられる。参加者が他の参加者の意見を認識し、他の参加者の意見を踏まえて自分の考え・意見をまとめることができたと考えられる。

Q2：今回のワークショップ型研修で、ファシリテーターのあなた自身が学んだこと、気づいたことはありましたか。

A：参加者の課題意識や発信力などのレベルが事前にわからない中で、不満が残らないよう極力全員均等に意見が言えるよう、また他者の意見に対してどう考えるかとの展開を心がけたが、気付くとの的確な意見を話してもらえる人に頼る傾向となっていた。また、時間の制約があり、途中から「まとめること」を目的として走ってしまったが、研修目的は「保護者が互いの意見で自身の理解を深め、今後の活動に生かすこと」だとすれば、参加者に不満が残ったのではないかと懸念し反省している。

B：ケータイを持たせていない保護者でも、持たせていない理由はそれぞれだということに気づいた（お金がかかるので持たせてないだけだと思っていた）。

C：自分のグループは他の人は全員が保護者で自分だけ独身男性だった。「実際のところを若輩者にどうぞご教示ください」というスタイルで挑むと、もっと意見が出やすい環境を作れた。地元の言葉、イントネーションで話してもらうと、意見が出やすいはずだった。ファシリテーターから積極的に現地の言葉を使用すればよかった。

D：ワークショップへの参加者レベルが異なるために、まずはそのレベル合わせを行うこと。参加者の中からオピニオンリーダーを探り出し、その人から他の参加者が実感できるような発言を引き出すための工夫が必要なこと。なるべく身近な例から、テーマに近づくこと等。

E：参加者から発表された課題の整理にあたっては、少し恣意的に誘導して、まとめてしまったと反省している。

F：仮に参加者が、自分がイメージしている学習ゴールに到達していないとしても、参加者がワークショップで到達した地点が、その参加者にとってのゴールであること。（言い換えると、）参加者各々のゴールに導いていくことが、ファシリテーターの役割ではないかと感じた。

Q3：今回のワークショップ型研修の運営上の改善点はありましたか（会場、時間配分、人数など）。お気づきになった事についてお書きください。

A：時間の制約がある企画において、1つの検討テーブルに10人は多かった。ただし、少人数になると、「研修生」ではなく「お客さん」が揃う可能性もあり、活発さが失われ

る。6人前後の人数で、企画側である程度、地域のオピニオンリーダーや先生を混ぜることが望ましいと考える。

B: 10人1班は人数が多すぎて、全員に話をふりながら参加させていくことが難しかった。6人程度が適正ではないか。ケータイを持たせていない親が多いと、議論が深まりにくいと思った。

C: グループの人数は今回の人数が限界。グループ数は適正。隣のグループの声が重なって参加者の発言が聞き取りづらい場面があった

D: 導き出す結論のイメージが不明確もしくは参加者に伝わっていなかった。何を目標に話し合うのかをもっと明確にしてもよいと思う。また、話し合える時間が短かったため、発表者の選定や発表の具体的なイメージを話し合うことができなかった。会場や人数については、調度よかったと思う。

E: 開催前は会場が狭い（隣のグループの声が気になる）のではないかと気になったが、実施の段になると、心地よい緊張感が漂い、良い研修環境だった。課題解決手順から、開始前には時間が短いと感じていたが、実際、時間に追われた感があったが、集中力の点からすると、適度な時間であったかもしれない。1グループの人数（10名）は、各参加者の意見をしっかり求めるという点から、少し多いと感じた。

F: タイマーの表示が気になった。グループメンバー相互の意見交換を充実させるためには、グループの人数は7, 8人が限度ではないだろうか。

Q4: 今回の研修を踏まえて、今後ワークショップ型研修を開催するにあたっての課題についてお書きください。

A: 時間に制限があることは当然であるが、素人集団なので、結果として短いと思われる今回は、制限時間が思考を邪魔していた。参加できる人や予算上も限られてくるが、休日の1日をかけて途中十分なブレイクを入れて実施する。あるいは、合宿形式で、日常と離れた場所で実施するなど、議論を楽しむ環境下で実施したい。

B: 事前に児童生徒の学齢、ケータイ所持について、聞いたうえで、グループ分けした方がよいと思った。

C: ファシリテーターの育成。書記役の配置（できれば専門の書記が各グループにいること

が望ましい)。

D：より具体的なテーマの絞り込みと時間の確保。セミナーとワークショップの違いについて参加者へ周知等。

E：現地（茨城）の研修会担当者の皆様も、とても的確に準備に対応されていたと感心した。不足していたマジックを直ぐに購入したり、少しでも大きいホワイトボードを持ち込んだりと。全国展開するにあたり、徐々に運営マニュアルが整備できると良い。

F：ファシリテーターの養成。ワークショップを行ったことのない地域へのワークショップへの理解（ワークショップの効果の説明資料を作るなどの措置が必要ではないか）。

Q5：特に情報モラルに関するワークショップを行う際に、考慮しなければならない点はございますか。

A：日本人はどのテーマにおいても理解できていない事柄を不安に感じ、それを突き詰めるのではなく他者の意見に左右される傾向にある。本テーマは個々の保護者層において、十分な理解が道半ばであることから、前段のミニプレゼンやオリエンテーションで、無用に不安をあおるような内容を入れてはならない。

B：保護者のリテラシーがあまり高くないことを考慮し、簡単な言葉遣いや、一部言葉の説明に考慮しなければいけないとおもいます。

C：どうやったら「本音」を引き出せるか。会場の広さ

D：前提条件として、インターネットのリスクに関する情報を持っていない方が参加すると、一足飛びに議論に入らなければいけないので、最低限の情報提供とアイスブレイク（議論に入るための心の準備）が必要であり、そのためにはもう少し、時間の確保が必須だと思う。

E：グループの参加者の発言・意見から学ぶという点から、参加者の属性（性別、保護者・教員等）に関して各グループ間で均質化したり、参加者の子どもの状況（ケタイ所持の有無、フィルタリングの有無等）を加味したりと、グループ分けが更に効果を上げると考えられる。

F：子どもを育てるものとしての保護者の自覚。ネットワーク社会の参加者としての認識。

「危険を煽る」ことではなく、「上手に付き合う」という視点。

Q6：今後、セミナー／シンポジウムとワークショップ研修を効果的に行うために、2つの形式の研修をどのように選択していけばよいと思いますか。

A：同じ人を対象に、2日間かけて2つの形式を実施する。あるいは3ヶ月、半年程度空けて、セミナーでの学びを日常で実践いただき、その経験を持ち寄ってワークショップで意見交換するといった方法が効果的ではないか。

B：まずは、広く浅くセミナー／シンポジウムを実施し、次いでワークショップで少人数でも深く理解し、効果的だと思った。

C：セミナーとワークショップとを同時に別会場で行い、最後に両会場で出た意見を共有する方式はどうか（別会場で同時に行い、スカイプなどで共有）。

D：どちらかを選択するのではなく、ひとつのイベントに上手く組み合わせていくことが肝要かと思う。ただし、そのイベントに応じ、双方のウエイトは変えていく必要もある。

E：セミナー／シンポジウムにおいても、ワークショップ研修の要素を加味すると良いのではないか。講演の中で、（研究）事例を提示し、隣席の参加者と相談した結果を、数人に発表頂くというケーススタディを地域の小中学校の勉強会で実施しているが、効果は感じている。

F：情報モラルに関するセミナーを行っていない地域に関しては、セミナー形式をイベントと絡めて行う。セミナー形式を何度か行っている地域に対しては、より深度を深めるためにワークショップを行う。地域との連携が可能な地域ではワークショップ型にする。「危険・所持禁止」を教育している地域に対しては、ワークショップ型にして、ワークショップ参加者のみならず、関係者も学ぶ機会を設ける（結局、現在の社会環境を考えると「上手に付き合う」方策が最善であることに気づいて頂く）。

Q7：その他、自由にご感想をお書きください。

A：講演をするほどの情報量と技量を有しているわけではないが、ファシリテーターとして保護者と一緒に考える、あるいは、考えてもらうことはある程度出来たと考える。今回のようなワークショップ型研修を、双方の立場で欲している保護者や関係者は全国に多数いると考える。今後、各地でこのような研修を増やすような仕組みを検討したい。

B：自分自身良い勉強になった。

C：貴重な経験をさせてもらった。

D：今回は、もっとも身近な例として、自分の携帯電話の使い方という視点から、参加に議論してもらい、そこから子どもたちの問題に発展させてみた。参加者の中には、保護者が責任を持って使わせているという方と、まだ持たせていない、子どもが小さいという方が混在していたので、経験者が経験談を語る方法を取り入れましたが、その時の参加者に合わせた手法を考え付くまでに時間が必要でした。

E：今回、茨城県でのワークショップに参加させていただき、感謝しております。同地域で、今後、どのような取り組みが展開されるか関心がある。同地域の具体的な取り組みの情報提供が欲しい。

F：安心協にとっての新たな取り組みで、より一層の意識向上が図れる。ワークショップは人手が掛かるが、それ以上の効果があると思われる。そのためには、ファシリテーターを育成していくことが必要ではないか。

2.5 第4回開催

2.5.1 開催概要

タイトル：文部科学省委託事業「ケータイモラルキャラバン隊」 徳島県 PTA 連合会 研修会

開催日時：平成 24 年 1 月 15 日（日）13 時 30 分～16:00（会場 13 時）

開催場所：徳島県教育会館 小ホール

定員：250 名

開催形式：トークセッション

主催：株式会社メディア開発綜研

共催：文部科学省 徳島県 PTA 連合会

後援：徳島県教育委員会

協力：安心ネットづくり促進協議会

2.5.2 プログラム

時間	場所・内容	登壇者	
13:30	開会挨拶	徳島県PTA連合会 会長	谷明彦様
13:35	＜文部科学省 説明＞ ケータイモラル、情報等に関する小学校・中学校での取組	文部科学省 スポーツ・青少年局 青少年課 課長 文部科学省 初等中等教育局 児童生徒課 生徒指導室長	勝山浩司様 郷知知道様
13:55	＜講演＞ 深刻化するネットいじめ その現状と保護者の役割	メディアジャーナリスト	渡辺真由子様
14:50	あなたは子どものケータイにどのように向 き合いますか？＜会場トークセッション＞ コーディネーター	メディアジャーナリスト 文部科学省 スポーツ・青少年局 青少年課 課長 文部科学省 初等中等教育局 児童生徒課 生徒指導室長 熊本市河内中学校 教頭 安心ネットづくり促進協議会 特別会員 (社)日本PTA全国協議会 顧問	渡辺真由子様 勝山浩司様 郷知知道様 桑崎 剛様 曾我邦彦様 曾我邦彦様
15:50	デジタル社会を生き抜く子どもたちのために＜総括＞	(社)日本PTA全国協議会 顧問	曾我邦彦様

16:00 終了

2.5.3 講演者プロフィール

講演者



渡辺 真由子（わたなべ まゆこ）メディアジャーナリスト

慶応大学卒。テレビ朝日系で報道記者を務め、ドキュメンタリー『少年調書』で日本民間放送連盟最優秀賞、放送文化基金優秀賞を受賞。退職後、カナダのサイモン・フレイザー大学でメディア・リテラシーを研究。現在はネット社会の子どもを取り巻く人権問題取材し、情報から子どもを守り、賢くメディアとつきあうノウハウを伝授。

著書に『大人が知らない ネットいじめの真実』、『子どもの秘密がなくなる日～プロフ中毒ケータイ天国』、『オトナのメディア・リテラシー』など。

トークセッションコーディネーター



曽我邦彦 （社）日本 PTA 全国協議会 顧問（前会長）

(株)童謡 代表取締役、(有)ソガクリエイティブ代表取締役。1980 年日本大学大学院理工学研究科（修士）卒業、同年(有)大庭音楽事務所入社。1994 年山西小学校 PTA 会長以降、西原村 PTA 連絡協議会会長、阿蘇郡 PTA 連合会会長、熊本県 PTA 連合会理事・会長、(財)熊本県 PTA 災害見舞金安全会理事長、NPO 法人日本国際童謡館理事長等々を歴任。現在は現職の他、省庁の多くの審議会、検討会等の委員を歴任。

2.5.4 シンポジウム概要

2.5.4.1 文部科学省施策説明「ケータイモラル、情報等に関する小学校、中学校での取り組み」

登壇者：文部科学省 スポーツ・青少年局 青少年課 課長 勝山浩司

文部科学省 初等中等教育局児童生徒課 生徒指導室長 郷知知道

<講演内容>

1.子どもの携帯電話等の実態把握について

子どもの携帯電話の学年別所持率、使用状況、学習への影響等についてデータを紹介。

2.子どもや保護者への啓発

子ども向け及び親子のルールづくりに係るリーフレットの紹介。青少年インターネット環境整備法の普及啓発状況についての説明。

3.学校での携帯電話の取扱い

小中学校への原則持ち込み禁止等、指針についての説明。

4.ネット上のいじめへの対応

「ネット上のいじめ」に関する対応マニュアルの説明。

5.情報モラル教育の推進

新学習指導要領の総則において、情報モラルを身に着けることを規定したことの説明。

6.平成 24 年度概算要求

青少年を有害環境から守るための取組の推進について、および本事業の継続についての説明。

図 2-37 文部科学省の取組資料

子どもの携帯電話をめぐる問題に関する文部科学省の取組	
1. 実態の把握 ・子どもの携帯電話の使用状況の把握 平成22年度全国学力・学習状況調査によると、小6の約30%、中3の約60%が携帯電話を持っている。また、小6の約10%、中3の約32%が通話やメール利用を毎日している。 ・子どもの携帯電話等の利用に関する調査 子どもたちの携帯電話の利用実態や携帯電話に対する意識等を把握するため、全国の小・中・高2とその保護者及び学校を対象とした調査を平成20年度に実施。(中2の携帯電話所有者の約90%がメール送信1日50通以上) ・いじめに関する調査を通じた実態把握 毎年実施している「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」において、平成18年度分の調査より、調査項目の見直しを行い、「いじめの態様」に「パソコンや携帯電話等を通じた」という項目を追加。(小・中・高・特別支援学校において、平成22年度32,924件 ※通学路、通学時間、帰校後の状況を含まない) ・学校ウェブサイト等の実態把握 青少年が利用する非公式サイト(匿名掲示板等)に関する実情調査を平成19年度に実施。全国で約38,000の非公式サイト(いわゆる学校裏サイト)が確認できた。そのうち、約2,000の非公式サイトの内容を確認したところ、誹謗中傷の言葉が約50%、わけのわからない言葉が約37%、暴力誘発の言葉が約32%含まれていた。 ・青少年が利用するコミュニティサイトの実態把握 青少年が利用するコミュニティサイトに関する実情調査を平成21年度に実施。調査期間中約10万件の投稿を確認し、うち注意を要する投稿、問題のある投稿は6,158件と全体の約6%。投稿者の約9割は女性であり、投稿サイト種別ではブログ・ウェブサイト(ブログ)が全体の約53%を占め、掲示板が約47%であった。注意を要する投稿、問題のある投稿の内訳は、個人情報の掲載が約60%、次いで不適切行為の書き込みが約19%となっている。この調査により、掲示板型のサイトからブログやSNSへの移行、監視が徹底されていないサイトがある、特定のサイトに特定の書き込み(自殺・自傷など)をする傾向がみられた。 2. 子どもや保護者への啓発 ・子ども向け及び親のルールづくりに係るリーフレットの作成・配布 平成22年2月17日、携帯電話のインターネット利用に際しての留意点やトラブル・犯罪被害の事例、その対処方法のアドバイスなどを盛り込んだリーフレット「ちょっと待って ケータイを正しく使おう」を作成し、全国の小・中・高2年生約120万人全員に配布。また携帯電話利用に係る親のルールづくり等に関するリーフレット「ちょっと待って!」は小・中のケータイも作成し、PTA団体・都道府県教育委員会等に対して配布。現在でも文部科学省HPからダウンロード可能。 ・ケータイモラルキャンペーンの継続 インターネット上のチャットや動画でのルールづくりの重要性を周知するための有識者等によるチャット講座を結成し、全国(6ヶ所)で保護者等を対象とした学習・参加型のチャット講座やワークショップなどを平成23年度より開催。 URL http://www.mext.go.jp/a_menu/seisyonen/moral/1313148.htm	・青少年インターネット環境整備法の普及啓発 平成21年2月10日に、内閣府、警察庁、総務省等と共同で、青少年インターネット環境整備法の4月施行とフィルタリングの普及促進のため、啓発活動に取り組むよう文書で依頼。平成23年3月23日に、「青少年が利用する携帯電話へのフィルタリングの普及について(協力依頼)」通知を教育委員会等に発出。 ・「e-ネットキャンペーン」の実施 総務省、文部科学省及び通信関係団体等が連携し、子どもたちのインターネットの安全・安全な利用に向けて、保護者、教職員及び児童生徒を対象とした啓発講座を実施。 3. 学校での携帯電話の取扱い ・携帯電話等をめぐる問題への取組の徹底 携帯電話の学校への持ち込みに関する調査の結果を踏まえて、小中学校への原則禁止を導き、高等学校の校内での使用制限等の指針を示した「学校における携帯電話の取扱い等について(通知)」を平成21年1月30日に発出。 4. ネット上のいじめへの対応 ・「ネット上のいじめ」に関する対応マニュアル・事例集(学校・教員向け)の作成・配付 「ネット上のいじめ」を発見した場合の対応の手順や指導の在り方、家庭との連携等について、マニュアル・事例集を平成20年11月12日に作成。都道府県教育委員会等へ配布。 ・学校ネットリテラシーに関する調査研究 ネットリテラシーの効率的・効果的な実施方法や、継続的な実施の在り方等について調査研究を平成22年度から実施。 5. 情報モラル教育の推進 ・新学習指導要領等の実施 小中学校及び高等学校の新学習指導要領の「総則」において、各教科等の指導に当たっては、児童・生徒が「情報モラルを身に付けること」を規定。小中学校については平成21年4月から、高等学校については平成22年4月から先行実施。また、教育の情報化に関する総合的な推進方策「教育の情報化ビジョン」を平成23年4月28日に策定。このなかで、情報モラル教育の重要性について明記。 ・違法・有害情報に適切に対応する能力の育成を含む情報モラル教育を推進 ◆平成18年度に情報モラル指導モデルカリキュラムを作成。 ◆平成19年度に情報モラル指導モデルサイトを構築。 ◆平成22年度に国立教育政策研究所において、小中学校教員向けの指導資料「情報モラル教育実践ガイドライン」を作成。 ◆平成22年度から、独立行政法人教員研修センターにおいて、情報モラル教育に関する指導者研修を実施。 6. 平成24年度予算案(案) ・青少年を有害環境から守るための取組の推進 (24年度予算額 60百万円 (23年度予算額 101百万円)) フィルタリングの普及啓発やケータイモラルキャンペーンについては継続。インターネットにつながる新たな機器への対応や緊急時に有効なインターネットの活用など青少年が研修するとともに、課題や対応策も含めて話し合い、その結果を家族や友人に対して発信する事業「青少年安心ネットワークショップ」を実施予定。また、HPよりダウンロードできる有害情報意識啓発動画の作成も予定。さらに先進的な取り組みを充実させる「地域における有害情報対策推進事業」も実施予定。

<講演風景>



2.5.4.2 講演セミナー「深刻化するネットいじめ その現状と保護者の役割」

講演者：メディアジャーナリスト 渡辺真由子

<講演内容>

- ・ ネットいじめの現状
- ・ 深刻化するネットいじめ
- ・ ネットいじめの対策として保護者ができること
- ・ 大人が抱くいじめに対する偏見について
- ・ いじめ加害者の保護
- ・ 解決策としてのメディアリテラシー教育

<講演風景>



2.5.4.3 トークセッション「あなたは子どものケータイにどのように向き合いますか？」

登壇者：メディアジャーナリスト 渡辺真由子

文部科学省 スポーツ・青少年局 青少年課 課長 勝山浩司

文部科学省 初等中等教育局児童生徒課 生徒指導室長 郷知知道

熊本市河内中学校 教頭、安心ネットづくり促進協議会 特別会員 桑崎剛

コーディネーター：(社)日本 PTA 全国協議会 顧問 曾我邦彦

<トークセッション内容>

- ・子どもたちを守るために大人ができること
- ・ネットを利用した犯罪被害
- ・フィルタリングの有用性
- ・情報リテラシーの向上が必要
- ・犯罪に対しての PTA の取組み
- ・徳島県の生徒指導への取組み
- ・小中学生のケータイにウェブ機能は必要か

<トークセッション風景>



2.5.5 第4回開催結果と評価

2.5.5.1 アンケート結果より

■ 講演について

参加後に感想を聞いた。文部科学省の講演については「とてもわかりやすい」と回答した人が12人(16.4%)、「わかりやすい」50人(68.5%)と8割以上の参加者が肯定的な意見であった。しかし一方で、「ややわかりにくい」が7人(9.7%)、「わかりにくい」1人(1.4%)と参加者によっては分かりにくい部分を感じた人も1割程度だがいたようだ。

渡辺氏の講演は「とてもわかりやすい」が30人(41.1%)、「わかりやすい」37人(50.7%)と9割以上の方が分かりやすかったと回答しており、非常に評価の高い講演となった。

会場トークセッションについては「とてもわかりやすい」19人(26.0%)、「わかりやすい」39人(53.4%)とこちらも8割以上の方が分かりやすいと回答している。若干他の設問より不明(未回答)の割合が多かったが、理解度は高い講演になったと言えるだろう。

図 2-38 文部科学省の講演について (N=73/徳島)

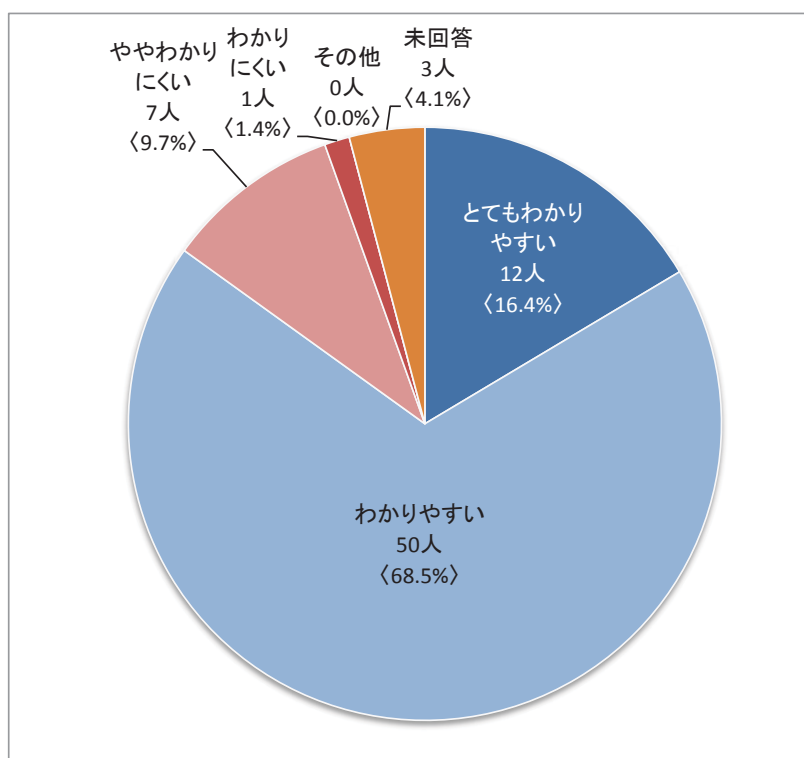


図 2-39 渡辺氏の講演について (N=73/徳島)

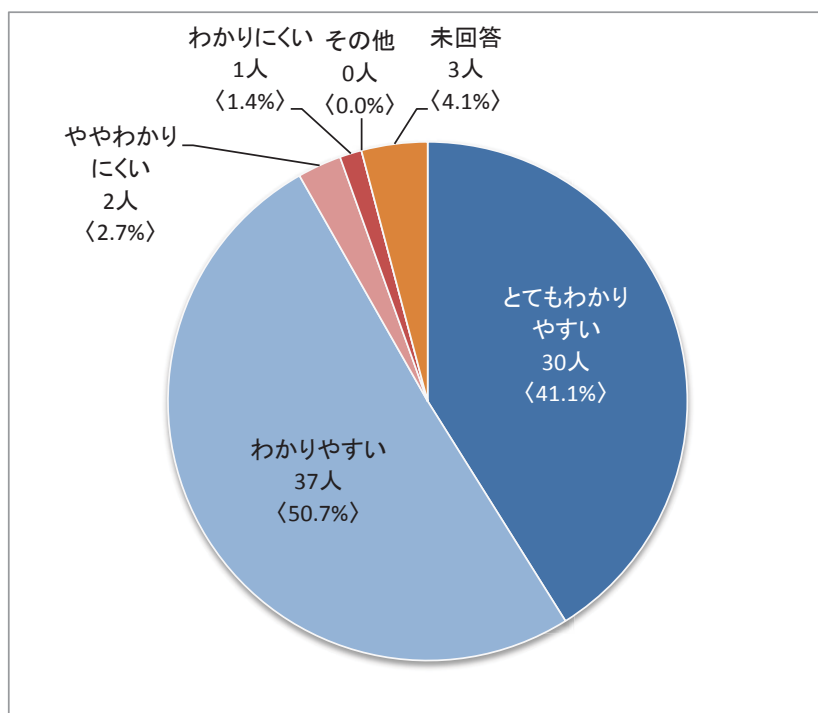
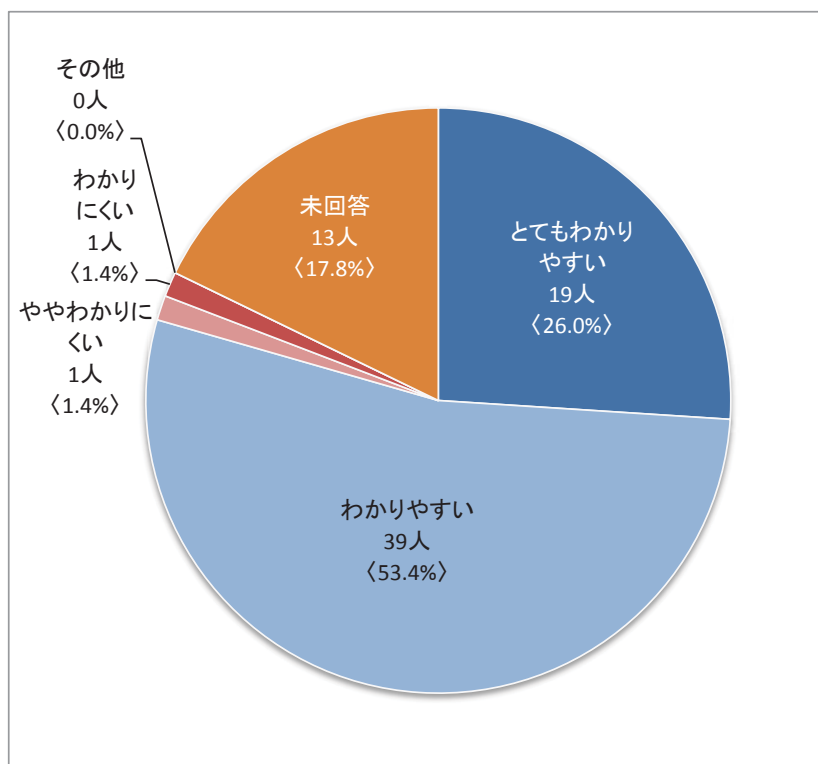


図 2-40 会場トークセッションについて (N=73/徳島)

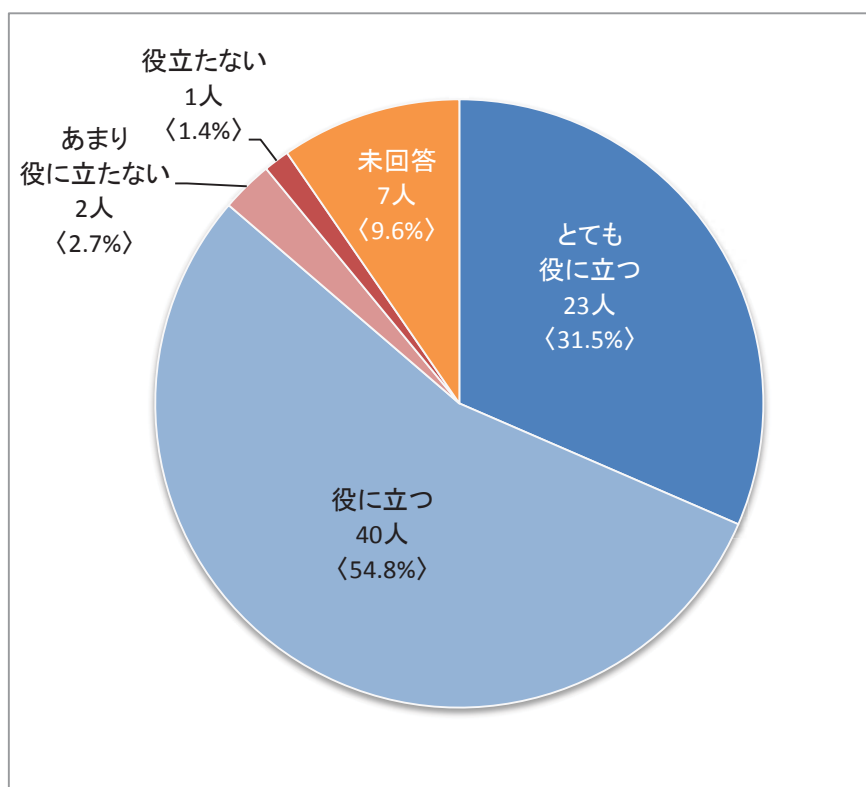


■ 講演会の内容は今後に役立つか

今回のシンポジウムの内容が今後の子育て・指導、活動や取組みに役に立つか聞いたところ、「とても役に立つ」が 23 人（31.5%）、「役に立つ」40 人（54.8%）となった。否定的な意見として「あまり役に立たない」と回答した人は 2 人（2.7%）、「役立たない」1 人（1.4%）であった。

加えて「とても役に立つ」「役に立つ」と回答した人にどんな内容が役に立つと感じたが自由筆記にて記入してもらった。「携帯電話に関わる現状が把握できた」「フィルタリングの重要性」「家庭で子どもとのルール作りが大切」「ネットでのいじめに関する現状と対策」といった内容が見られた。

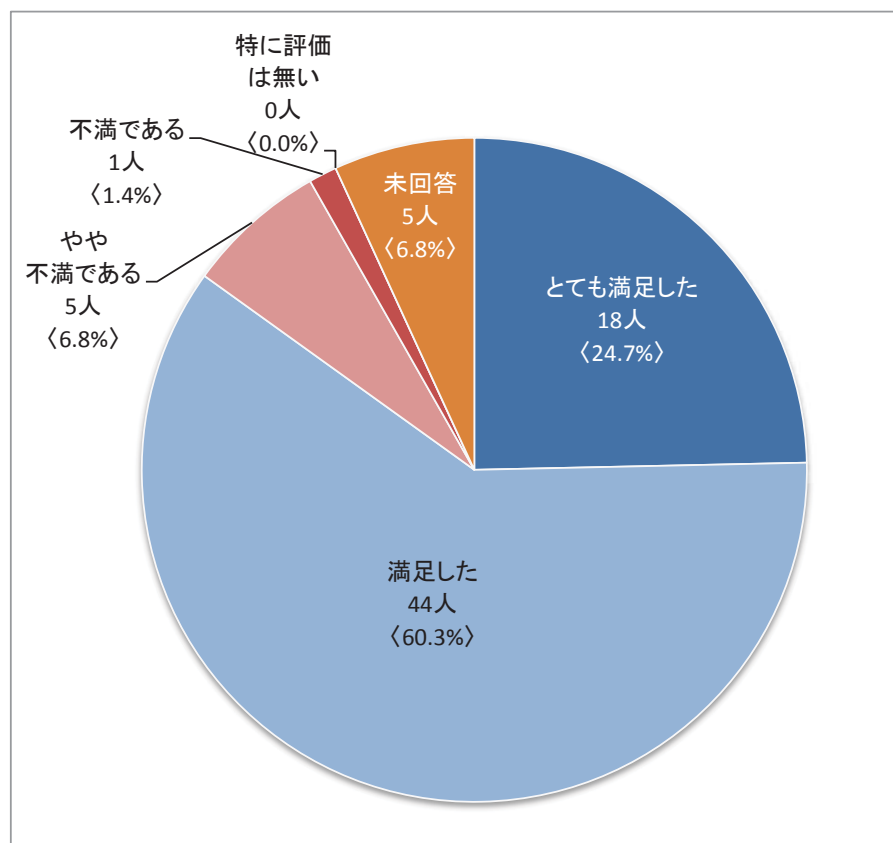
図 2-41 講演会（および会場トークセッション）の内容は役立つか（N=73／徳島）



■ シンポジウムの満足度

本シンポジウムの満足度について聞いたところ「とても満足した」と回答した人は18人（24.7%）、「満足した」が44人（60.3%）という結果になった。またネガティブな意見としては「やや不満である」が5人（6.8%）、「不満である」が1人（1.4%）となった。加えて、満足した理由を自由筆記にて記述してもらった。内容としては「携帯電話について知らないことが分かったから」「文科省が直接来ていて熱意が伝わった」「携帯が犯罪の入口になることが分かった」などが上げられた。満足できなかった意見としては「講演者がネットに対して偏見を抱いているように感じた」「法律を変えなければ無理だと思う」という意見が上がった。

図 2-42 シンポジウムの満足度（N=73／徳島）

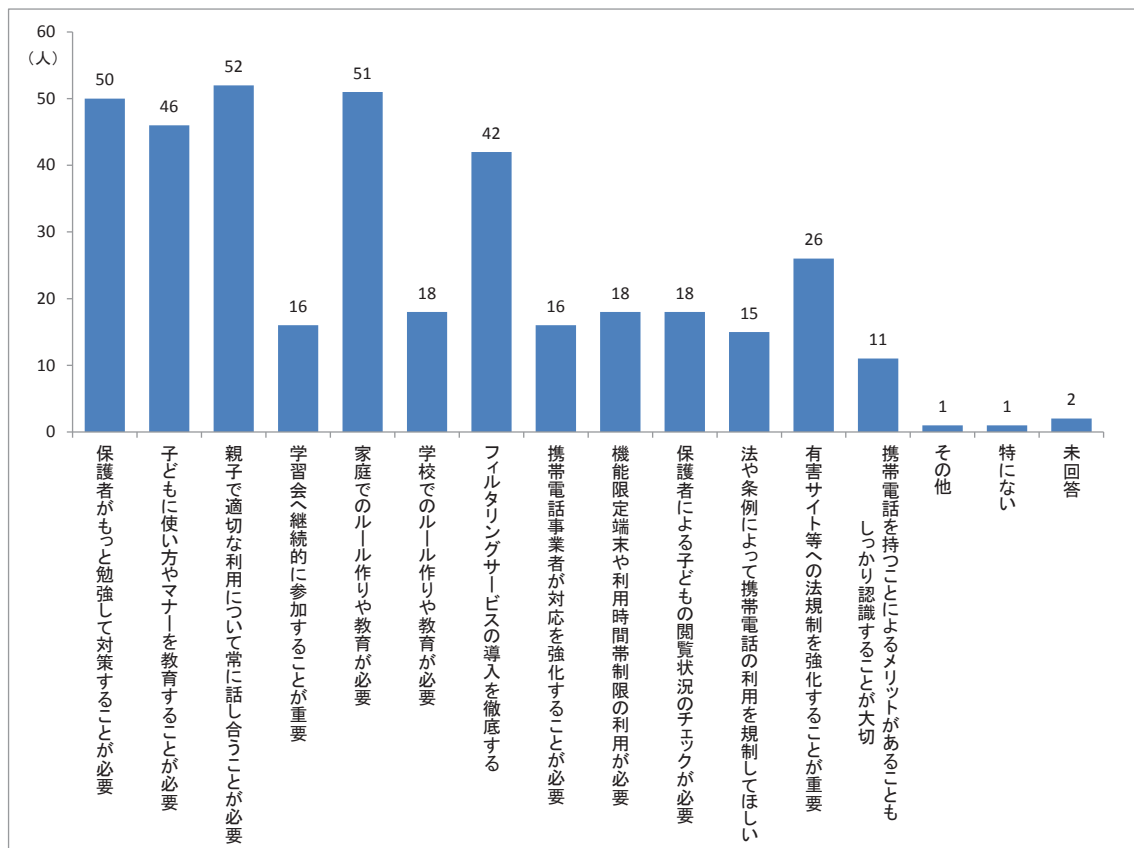


■ シンポジウムに参加して子どもの携帯電話利用についてどう考えたか

子どもの携帯電話利用についてどのような考えを持ったかを参加者 73 人に聞いたところ、「親子で適切な利用について常に話し合う必要がある」と回答した人が最も多く 52 人、次いで「家庭でのルール作りや教育が必要」が 51 人、「保護者がもっと勉強して対策することが必要」が 50 人となった。他に回答者が多かったものは「子どもに使い方やマナーを教育することが必要」46 人、「フィルタリングサービスの導入を徹底する」42 人となった。

最も少なかったのは「携帯電話を持つことによるメリットがあることもしっかり認識することが大切」で 11 人と選択肢の中では最も少なかった。

図 2-43 参加後の子どもの携帯電話利用についての考え（N=73：複数回答可／徳島）



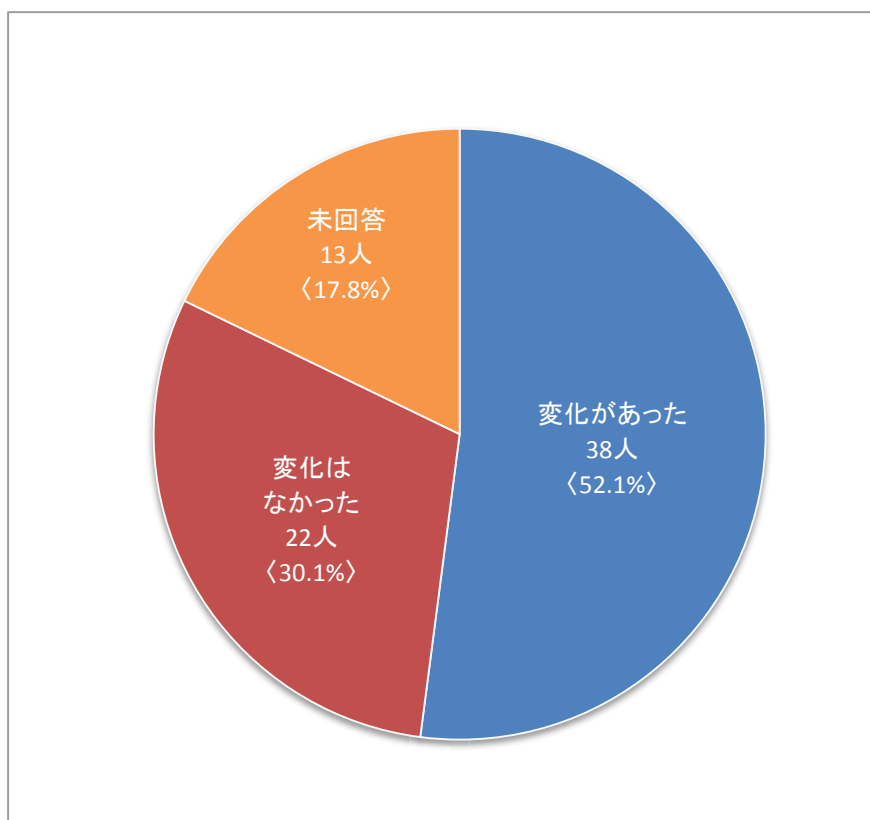
■ 参加後の心境、考えの変化について

本シンポジウムに参加して自身の心境や考えに変化があったか、加えて変化があった場合、それはどのような変化だったかを自由筆記で記載してもらった。

「変化があった」と回答した人は 38 人 (52.1%) と約半数が「変化があった」と回答した。その内容は「親自身がもっと勉強しなければならないと思った」や「子どもともっとコミュニケーションを取ろうと思った」などの意見が多かった。

一方で「変化はなかった」と回答した人は 22 人 (30.1%) だった。「未回答」も 13 人 (17.8%) と 2 割弱から回答を得られていないため、評価については難しい部分がある。また、「変化はなかった」と回答した人の中にも、今回の内容については以前から知っていたという意味で変化はなかったと回答する人もいるため、一概に本シンポジウムの内容が参加者にとって評価されていないとは言い切れない部分もある。

図 2-44 シンポジウム参加後の心境、考えの変化の有無 (N=73/徳島)



■ シンポジウムに関する意見

図 2-45 シンポジウムに参加して、あなたの心境やお考えに変化はありましたか？

児童、生徒の情報リテラシーについての学習を学校で、家庭でもっと学習や話し合いをするべきであると考ええるようになった
子どもに無責任に携帯を持たせている保護者に今回のような研修の機会を設ける必要があるが、どのように参加させるかが課題
もっと子どもと話し合う必要がある
子供だけでなく親の教育が必要
もっと現実におきている事件や現状に対して理解しておくべきであると思いました。ケータイだけに注意すればいいのではないという事がわかって良かったです
規制も重要ですが、子供自身が安全な使い方を認識していないと根本的な解決にはならないと感じました。(もたせるべきではない)
携帯を持たせてもよいのかなと思った
子どもと携帯、パソコン、Web等について話し合うことが大切
知らないことがいっぱいあるのでもっと知らないといけない
いじめの現実を知った。文科省や学校の方針や知識の
家庭での話し合いが必要。何となく…ではいけない
ルール作りと、フィルタリングをしようと思います。親がしっかり勉強して、子供におしえないといけない
プロフやリアルの実態が良く分かり、何気に見逃すことが多かった自分を反省
家庭での教育の大切さを痛感しました。来ていなかった保護者に伝えていきたいと思います
親としてもう1度考えを改め、勉強し振り替える事が大切である
子供に指導をしっかりする
何でもダメでは、子供に役立つものも取りあげるのも、上手に使いこなすことの大切さや、ルールを守る、モラルのある子供にあるべきように教育していくことの大切さを教えてもらった
理容の情報共有の大切さ
ケータイ、ネットの使い方
子供に安易な気持ちで買い与えてはいけないという気持ち
ケータイのルール、情報モラル等の重要性は認識していて、これまでも子供に教えてきたが、あらためてその大事さを再認識できた
まだ小3なので、けいたいをもたせることはまだまだ先の話と思っていたけど、事前に話が聞けて良かった
今子供が使っていないので漠然としか考えていなかったが、ケータイを持たせるときの前準備として考えさせられることがたくさんありました
持たせないのがいいのではなく、持たせる場合でのルール、教育が必要
ネット等について、アメリカの子どもに対する厳しさを知り、大変参考になりました。決して匿名にはならないということも学びました
現状がよく理解できた
携帯の持つ子どもの低年齢化に対しても対応できるよう私達大人も学習していく必要性を強く感じた
ケータイについての現状把握、解決についての知識等(役立つと感じたの記入と同じ)
親がもっと勉強する必要がある
自分自身もっと勉強する必要があると感じた
携帯の使い方、ルールを決める事が大切
さらに、こどもたちを取り巻く情報化社会の様子を知っておかなければならない
子供の行動をしっかり観察することが大事だと思った。(関心をもつ、見守られていることを感じさせる)
保護者がもっと勉強して対策することが必要

図 2-46 シンポジウムに対するご意見を自由にお書きください。

お世話になりました
日頃から子供とのコミュニケーションを取って、何でも話し合える関係を作っておく事が、何よりも大切だと考えるのですが、そういう関係をどうやって作るかが課題です。そういう思いを改めて感じる事ができ良かったです。子供がパソコンをやるときは親と一緒にやるようにしている
子供の頃自分が危険だと感じたものは子供に伝えられるが、ケータイは自分が子どもの頃になかったもの。危険と感ぜられてなかった。勉強になりました
親として何ができるかヒントとなりました。今回はありがとうございました
いい会では、ありがとうございました
目先の事でいくら話し合っても限界がある。根本的問題は別で、社会全体のルール、方向性をもっと明確になって欲しい
前P連会長はちょっとリードしすぎているような気が…がんばって頂いているのにスミマセン…
企業責任や有害情報発信者への追及が必要
家庭で子育てに責任をもつことが大切だと再認識できた
高1ではまだ子供だと思う
わかりやすいトークセッションがあり、勉強になりました。ありがとうございました
分かりやすく又、学校単位で学習会をして欲しい
もっともっと文部科学省が来て、講演をして頂きたい。本日は、ありがとうございました
また機会を作って欲しい。もっと時間が欲しいです
さんまを実践していきたい。外あそび大事
情報機器にまつわる現状がくわしくわかり、非常に勉強になりました
親が守れないのに子は守れないと思います。学校のルールも交通ルールと同じ、守らなければ同じ
このような学習会を身近なPTAでできればもっと良いと思います
情報リテラシー教育の重要性を認識することができた。文科省と直接対話できるこのような機会は今後とも増やすべきである。渡辺氏の講演はネットによるいじめの現状を短時間で知る事ができた。(時間が少しオーバーしたのは若干マイナス)
講演中に写真を撮影している人が目立ちすぎて気になります。規制してほしい
携帯における被害の現状、対応策について詳しく話していただいたが、もっと多くの参加者を得る事ができればよかった
企業等にもアピールすべき
参加者をもっと多くするべきであろう。お忙しいとおもいますが、県教育長さん、次長さん、副教育長さん、知事とうおいでになるべきでしょう。Q5のお子様をお持ちですかという表現は子どもは親の所有物ではありません。いますか、おられますかという表現にするべきである。人権教育をやり直していただきたい。
今後とも頑張ってください
ケータイのみならず、IT関係情報端末機器の運用マナーを保護者、子供、教職員が連携して取り組むべき課題であると思う
休日に子供をおいての参加なので、時間は守って欲しい
うちはPM9:30以降の使用禁止、部屋への持込不可、充電器は親と共用のみ、こちらからメールは(友人に)は基本NG、鳴ったら「誰からか」告げさせる(内容はさすがに踏み込まないが)、Webへのアクセスは禁止(不可能に設定している)、食事中は触らない、と家でルールを決めて持たせている。家庭の事情・都合で持たせることは仕方ないと思うが、使用についてのルールをきちんと決めて、守らせれば何の問題もなく便利なツールとして必要だと思う。今回は小中(義務教育)での話でしたが、例えば高校に入り、アルバイトで携帯代を稼ぐようになると、フィルタリングを外したがるようだ。自分で払っているんだから自由だろうという理由だそうだが、自由を主張するには責任と義務とモラルの存在を十分に分かるべきだと思う
いじめは加害者のケアが重要だと認識した
このような機会をもっとふやしていく工夫が必要